題名「農村におけるローカルな価値意識の共有可能性に関する研究」

報告者　小山田 晋

何かが大切だと感じていながら、それが表現できなくて、他者にうまく伝わらないという事態があるかもしれない。経済学的な視点からのみ環境評価や地域づくりを行うと、そうした表現できない価値を無視してしまう可能性がある。というのは、価値は必ず貨幣量で表現できるということを前提に経済学は成り立っているからだ。環境評価を批判するのは、例えば Sagoff だ。彼は、宗教改革直前の免罪符の話題を引用しながら、貨幣価値をつけることでおとしめられる価値もあることを説く。木谷忍は、文脈不一致型 RPG を設計し、地域づくりで忘れられがちな、地域住民が潜在的に持っている価値意識を引き出すことを目指した。しかし、これらの研究ではそのような表現できない価値意識が存在することはすでに前提とされており、確認はされていない。この報告では、農村というローカルな共同体における「表現できない価値意識」を、「他者との共有できなさ」から根拠付けることを目的とする。

価値意識の「共有できなさ」は、価値判断に関する会話文の文型から推測できる。ここで参考にするのは言語学者神尾昭雄の「情報のなわ張り理論」だ。この理論では、会話の際の「会話内容」と、「話し手」と「聞き手」の三項の関係から、日本語の平叙文の文末が決定することが明らかにされている。例えば、話し手にも聞き手にも身近な会話内容のとき、平叙文の文末は「～だね」という直接ね形（直接形＋ね）となり、話し手には身近でないが、聞き手には身近な会話内容のときは「～みたいだね」という間接ね形（間接形＋ね）となる。この理論を応用し、報告者は会話文選択による調査システムを作成した。この調査システムでは、非調査者は農村に帰省した大学生という仮想的な役割を与えられる。非調査者は農村での会話場面を与えられ、ついで、会話場面に関連した人物に話しかけるという設定で、会話文を選択する。会話文は、会話場面に関する価値判断の平叙文だ。もし非調査者が農村住民と価値意識の共有ができないと考えるならば、間接ね形の文を選択するだろう。そうでないならば直接ね形文を選択するはずだ。そして、価値意識の共有ができるのは同じ農村住民であるはずなので、直接ね形文を選択するのは農村に身近な人物であるはずだ（ただし直接ね形文は調査時には加工し、「ほら」文という形式にしている）。

以上のような調査システムを実際に大学生相手に用いて仮説を確かめた。出身ごとに会話文選択値の平均を比較したところ、確かに農村出身者の方が「ほら」文を選択しやすい傾向が現れている。幼少期の経験と会話文選択の関連も確認したが、出身ほど大きな影響は見られない。価値意識の共有に最も大きく働く要因は出身であるようだ。

引用文献　神尾昭雄「情報のなわ張り理論」大修館書店,1990

木谷忍 「「農」とふれあう人間行動に着目した新しい生活空間の形成 に関する基礎的研究」， 平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究（B)研究成果報告書, 209ｐ.,200

Sagoff,Mark ”The Economy of the Earth”, Cambridge University Press, 1990